# 酪農家による環境保全活動と酪農地帯における環境教育

## ── 北海道Ａ町と熊本県Ｂ市の事例より ──

發　地　喜久治

# Environmental Preservation Activities by Dairy Farmers and Environmental Education in Dairy Farming District

Kikuji HOTCHI

酪農学園大学紀要　別　刷　第 31 巻　第 1 号

*Reprinted from*

”Journal of Rakuno Gakuen University” Vol.31, No.1 (2006)

J. Rakuno Gakuen Univ., **31** (1) : 39～48 (2006)

# 酪農家による環境保全活動と酪農地帯における環境教育
## ── 北海道Ａ町と熊本県Ｂ市の事例より ──

發　地　喜久治*

# Environmental Preservation Activities by Dairy Farmers and Environmental Education in Dairy Farming District

Kikuji HOTCHI*
(June 2006)

本稿は，2005年度酪農学園大学・酪農学園大学短期大学部共同研究の助成を受けた「酪農担い手育成･参入のための支援システムの確立研究」（研究代表者　荒木和秋）の成果の一部である。

## １．はじめに

畜産業の円滑な経営継承が課題となっているが，中山間地域の酪農地帯におけるこの課題への取り組みは，経営の担い手の確保と同時に，自然環境を保全し地域社会を維持発展させていく担い手の確保対策としても重要である。

畜産経営の後継者確保率は他部門と比べると高い状況にあり，農外からの新規参入者も注目されるところであるが，経営継承の中心的な流れは未だに親子間継承にある。食料・農業・農村基本法が制定された直後にまとめられた日本型畜産経営継承システム検討委員会報告から，この間の担い手確保対策の留意点を見ると，①新規就農者を育成するための研修制度の確立，②新規就農希望者及び経営移譲希望者等に関する情報のデータベース化，③後継者がいない健全経営の円滑な継承，④新規就農を促進するための融資制度，⑤関係機関との連携の下で経営移譲農場主の生活拠点の確保，など５つの課題が提言されている。（同委員会，2000年〔1〕）。さらに，同委員会メンバーによるその後のフォローアップ報告書では，経営継承の中心は今後とも後継者になると想定し，新規就農と経営継承の受け皿としての法人経営の役割などを検討している（酪農ヘルパー全国協会，2005年〔2〕）。これらの諸課題がさらに検証され，円滑な経営継承が実現して行くことが望まれる。

ところで，新規就農は，直接的には職業選択の結果であるが，農場の所在する地域に居住することを選択するに至る過程において，自然環境や地域社会など様々な要素が検討され，それらを総合的に判断した結果でもあると考えられる（荒木，2002年〔3〕）。すなわち，担い手の確保対策については，畜産業の経営そのものと同時に，地域社会を総合的に考察する視点も重要であると言える。

そこで本稿では，地域社会の様々な側面のうち，環境と教育を考察対象に取り上げることにする。新規就農者を経営の継承者としてだけでなく，環境保全と地域社会の担い手として位置づけるためには，環境と教育の視点が特に重要であると考えたことが，課題限定の理由である。具体的には，①酪農家自身による環境保全活動，②小中学校における環境教育の現状，③後継者予備軍と目される中学生の進路選択と地域への意識，などについて北海道と熊本県の中山間地域の酪農地帯における活動事例調査と中学生へのアンケート調査結果にもとづき考察する（北海道は道東のＡ町Ａ地区，熊本県はＢ市Ｂ地区）。

なお，本稿は荒木和秋を研究代表とする2005年度共同研究「酪農担い手育成・参入のための支援システムの確立研究」の研究成果の一部である。

## ２．北海道Ａ町における環境保全活動と環境教育

### １）酪農家による植林・ミズナラ林保全

北海道の酪農地帯では，2000年度から実施されている中山間地域等直接支払交付金制度の対象地域に指定された場合，同制度による多面的機能を増進する活動として，廃屋の撤去や景観維持のための植栽など多様な活動が酪農家によって取り組まれることになる（發地，2005年〔4〕）。道東に位置するＡ町も

* 酪農学園大学酪農学部農業経済学科食料経済史研究室
Food Economic History, Department of Agricultural Economics, Rakuno Gakuen University, Ebetu, Hokkaido, 069-8501, Japan

同交付金制度の対象地域に指定され，表１の通り2000年度から2004年度までの５年間に，農業生産活動，多面的機能，生産性・収益の向上に係わる活動を実施している。Ａ町農協が事務局を務める同交付金制度による集落協定の範囲は町内の酪農地帯のほぼ全域になり，環境保全対策として森林環境保全（無立木植林84.38 ha），苗木植樹（屋敷林等苗木提供21,708本）などの実績があるのが特徴である。

Ａ町の活動は，酪農の生産者組織で，町内の地区ごとに９組織ある酪農振興会が事業主体となって進められた。2001年度の環境美化と地域の景観づくりが評価されて，北海道開発局が主催する「わが村は美しく―北海道」運動第１回コンクールの景観部門で銀賞（北海道開発局長表彰）を受賞している。ここで，Ａ町の中でも特徴的な取り組みを実施しているＡ地区酪農振興会の環境保全活動を見ることにする。

Ａ地区酪農振興会（2005年度会員52戸）では，2002年５月にエゾヤマザクラの苗を地域内の国道から市街地までの約４kmの直線道路の両側に８mほどの間隔で１千本植栽している。植栽した道路はかつて銀座通りと呼ばれていたことから，往時の賑わいをしのび花の美しさを愛でることもできるエゾヤマザクラが選択されることになった。Ａ地区の人口世帯数は，2004年の住民基本台帳によると117世帯，387人である。その中で，Ａ地区の2002年度の農家戸数（全て酪農家）は54戸であり，これらの農家で組織する酪農振興会が，老人クラブ，小中学校，保育所などの地域団体や教育機関に呼びかけて，計150人の参加を得てサクラ苗の植栽作業に取り組んだ。その準備のために，前年の秋に酪農振興会役員14名が，桜の苗が８m間隔で植栽できるように下草刈りを行っている。その後の管理として，道路は草地からの風が直接当たり，特に冬期は吹きさらしになるので，枯れる苗の更新が必要になる。そこで，サクラ苗は毎年秋に点検して，当初植栽した本数の１割に相当する約100本を翌2003年より補植している。

Ａ地区では，サクラ苗の植栽をきっかけに，さらに地域全体の環境を考えるようになり，市街地に隣接しながら荒れていた林地を整備する「ミズナラ林を守る会」の活動に発展した（表２）。対象となったミズナラ林は根室本線のＡ駅に近い国有地で約５haの面積があるが，特定の利用目的もなく放置された状態にあった。そこで2004年２月より酪農振興会を中心にミズナラ林の整備･保全が話し合われ，「ミズナラ林を守る会」が同年４月に発足したのである。その際，地域全体の運動として展開するため，守る会の母体は，地域内の11自治会（町内会）の集まりであるＡ地区連合会が担うことになった。

2005年に国有地であるミズナラ林の釧路財務事務所からＡ町への貸付けが実現し，さらに，「ミズナラ林を守る会」による町への要望にもとづき，ミズナラ林は町からＡ地区連合会へ管理委託されることになった。Ａ地区連合会会長宛の町役場の文書「ミズナラ林の管理及び使用について」によると，管理委託内容は，①面積：50,095.03 m²，②委託期間：2005年７月１日から2007年３月31日まで，③使用目的：地区環境林及び学習林，などとなっている。さらに，使用計画として，①環境教育の場としての機能を持たせ，また散策路として幅１～２m程度下草を刈り歩道を作る，②自然学習林の機能を持たせるため，その部分の下草を刈るとしている。この管理委託により，地域住民が共通して利用する環境林

**表１**　Ａ町中山間地域等直接支払制度による実施事業一覧（2000～2004年度計）

| 事業名 | 内　　容 |
|---|---|
| 酪農村地図の作成 | 作成 |
| 合併浄化槽 | 190戸設置 |
| 不要建物解体 | 廃屋93戸，サイロ213基，畜舎他103棟，ハウス33棟 |
| 不要農機具車輌撤去 | ９地区酪農振興会 |
| ラップ・ビニール処理 | 698.132トン |
| 地区位置図 | 11ヶ所 |
| 各地区振興会視察研修 | 地区振興会　管外視察 |
| 海外視察研修 | アメリカ・ニュージーランド他90名 |
| 乳質改善（プレートクーラー） | プレートクーラー148戸 |
| バルククーラー温度センサー | バルククーラー温度センサー211個設置 |
| 森林環境保全 | 無立木植林84.38ha |
| 苗木植樹 | 屋敷林等苗木提供21,708本 |
| 多様生物生息環境保全 | ビオトープ調査 |

（出所）Ａ町農業協同組合資料より作成。

**表 2**　A地区酪農振興会の環境保護活動（桜とミズナラ関係）

| 月別 | 2003年度 | 2004年度 |
|---|---|---|
| 4 月 | | 第 1 回ミズナラ林を守る会会議（会長，副会長，事務局出席） |
| 5 月 | | ミズナラ林の現地調査（会長，副会長出席） |
| 6 月 | | ミズナラ林を守る会会議（会長，副会長出席）<br>ミズナラ林を守る会で林を守る活動の要望書を町に提出（会長出席） |
| 9 月 | 枯れた桜の確認（役員） | 道路の桜の木のチェック |
| 10月 | 桜の木の補植（120本） | 道路の桜の木の補植 |
| 11月 | | ミズナラ林を守る会会議 |
| 2 月 | 役員会でミズナラの保護について協議 | |

（出所）A地区酪農振興会総会資料より作成。

としての整備が進められ，小中学校での環境教育の場としても活用されるようになったのである。

### 2）A小中学校での環境教育

A地区には 2 小学校と 1 中学校があり，A地区連合会が管理するミズナラ林に隣接しているのはA小中学校である。なお，児童数･生徒数が少ないため，A小中学校は同一の校舎を利用し，施設等を共有している。A小中学校の教員数は，小学校担当教員が 5 名，中学校担当教員が 4 名である。

⑴　中学校における環境教育プログラム

A小中学校の 2005 年度の中学校には 3 世帯から 3 名が通学し，各学年にそれぞれ 1 名在籍している（うち酪農家は 1 世帯）。2005 年度の環境教育プログラムは，5 月の第 1 回総合的学習の時間に「自然環境」をテーマとして取り上げ，ミズナラ林で学習している。具体的なプログラムは，霧多布湿原センターの職員を指導員として招き，自然の木を見るポイント，自然の音の聞き方などを内容とする森の観察方法の指導を受け，約 3 時間の観察学習を実施している。総合的学習の時間は，前期（4～9 月）は週平均 4 時間をベースに計画され，学校外での観察・調査学習として，ミズナラ林の観察の他に，6 月にゴミ処理とリサイクルをテーマに町の処理施設を見学し，7 月に自然をテーマに町内の無人島（A地区は太平洋にも接している）を探求している。自然環境の学習内容をもとに 10 月の学校祭では，「ミズナラ林を守れ」と題する生徒の演劇が発表されている。

ミズナラ林は，今年から学習林として本格的に利用できることになったので，継続して 3 年計画で取り上げることを学校側は考えている。3 年目は，他地区の自然とも比較しつつ，自分達でこの地区の自然をどう保全して行くのかを生徒自身に考えさせ，その成果を発表させるプログラムを企画している。

⑵　小学校における環境教育プログラム

A小中学校の 2005 年度の小学校には，8 世帯から 11 名が通学している（うち酪農家は 5 世帯）。環境教育については，総合的学習の時間以外にも各授業のなかで地域の自然に触れるように内容を工夫している。例えば，水の循環と海産物のカキ養殖の関係，水産資源の保護のために森を漁業者が守る必要性のあること，湿原をコンブ漁師が守る話，酪農とふん尿処理のあり方などを理科，社会科，国語などの授業で触れるという工夫である。

週に 4 時間ほどの総合的学習の時間を，自然体験，国際理解，福祉など，いくつかのテーマに分けて実施し，2004 年までは，自然体験は霧多布湿原センターへ行って実施していた。福祉に関する学習については，老人ホームで介護付き添い体験学習として実施している。その他に，地域の古老から戦時中の話を聞く学習や，地域にある特徴的なものを見学に行くなどの「調査隊」や「昔あそび」などのテーマにも取り組む。2005 年度の自然体験学習では，ミズナラ林での自然観察，湿原センター見学，冬期の歩くスキー体験などに取り組んでいるが，今後の学習プログラムとして，どこにどんな木があるかを調べて，地域の森のマップ作りを行うことなどを計画している。また，冬期には，「タンチョウをグランドに毎日呼ぼう」を合言葉に，デントコーンを使ったエサ場を校庭に作って 1 月～ 3 月まで観察する学習も行っている。

## 3．熊本県Ｂ市における環境保全活動と環境教育

### 1）酪農女性グループによる廃油せっけんづくり

熊本県Ｂ市は阿蘇山麓に位置する 4 市町村が合併して 2005 年 3 月に発足した。今回調査対象としたのは，市内でも畜産の盛んな旧Ｂ村の酪農女性グループの活動と旧Ｂ村を学校区とするＢ中学校の環境教育である。旧Ｂ村は，2000 年国勢調査による世帯数

は1,447世帯であり，2000年センサスによる農家数は533戸になる。2005年度の酪農家戸数は71戸である。

酪農家の婦人で組織される酪農女性グループは，2001年4月に25名の参加を得て結成され，2006年3月現在で28名の会員数になっている。従来から農協の酪農青年部の活動の一環として，若妻だけで年1回ボーリング大会などの交流会が開催されており，その活動が発展する形で結成された。青年部の活動は男性中心になりがちで，夫婦そろって出る活動は少なかったため，月々千円の会費で女性だけの集まりを作り，活動することが有志の中から提案され，会の結成に結びついた。旧B村はホタルの生息地としても知られており，このような環境の保全に役立つ活動に取り組むことを当初から話し合い，特に，家庭から出る廃油を原料にしたせっけんづくりを活動の中心に据えることした。

年間の活動プログラムを2005年度の実績から示すと次の通りである。

4月：花見会を実施し，会員間の交流を深めた。

9月：全体研修会として，体験実習会を実施している。内容は，阿蘇ミルク牧場を訪問し，アイスクリームづくり，パンづくりを体験するとともに，宇城市の「食と農　体験塾」（農家でもある塾長の指導を受けながら，地元の食材を使って訪問者が自分で料理を作る）を訪問して，子どもたちと一緒に本当のおいしさを体験した。

10月～11月：廃油せっけんづくりに農協の調理室で取り組む。各家庭の廃油の他，Aコープと小学校の廃油も原料とし，カセイソーダ，水と混ぜ合わせ，洗浄した牛乳パックに流し込んで，成型して出来上がる。牛乳パックは，小学校の給食で使われたものを引き取り，洗う作業は子どもたちにも手伝ってもらう。2005年は，この廃油せっけんを600個製造した。

12月中旬：旧B村の酪農家71戸に廃油せっけんをお歳暮としてプレゼントした。役員が4地区分担して各戸に届けた。その他のせっけんは，農協のカウンターに置いてもらい2個入り1セットを100円で販売する。

12月下旬：忘年会を実施した。

2月：今年度2回目の廃油せっけんづくりに取り組む。このせっけんは毎年3月に地元のビックイベントとして実施されている鞍岳登山マラソンへの参加者約300人に，青年部が用意した牛乳と一緒に参加賞として提供された。

2）B中学校での環境教育

旧B村全域を学校区とするB中学校は，1学年2クラスの編成で全校生徒数は183名である（表3）。B中学校では，環境教育及び体験学習に関わる学年ごとのプログラムとして，1年生のファームステイ，2年生の職場体験，3年生の環境調べ学習をそれぞれ重点課題としている。

1年生のファームステイは，2005年で12回目となる行事で，農協青年部の協力を得て，畜産農家（酪農，肥育，養豚）と園芸農家に宿泊して農作業を体験する。午前中に開校式を行い昼に農家に入り，翌日の昼まで滞在する。農家出身者は生徒総数の約4割と見られるが，普段家の農業の手伝いをしていないと想定されるため，農家の子弟であっても良い体験になると学校では捉えている。また，学校近くのキャンプ施設で1泊2日の宿泊学習を行い，カヌー体験，森林の下草刈り，キャンプ施設近くのリサイクル施設の見学などの環境学習を実施する。

2年生の職場体験は，Aコープ，コンビニ，ガソリンスタンドなど地元にある職場に2日間通って仕事を体験するプログラムである。

3年生は環境について調べ学習をするが，そのテーマ設定は2年生のうちから準備される。2年生は進級直前の3月に河川清掃を行って環境への問題意識を育み，3年生に進級してから，水質とホタルの生息の関係などについて地元住民から話を聞いて学習を深める。各学年での取り組みと学習の成果は，11月に実施される文化祭と学習発表会で，生徒たちから発表される。

## 4．酪農地帯における中学生の意識調査結果

1）アンケート調査の実施方法

調査目的：酪農地帯における中学生の生活実態と地域に対する意識および進路選択について明らかにし，地域の担い手の確保対策を考察するための基礎資料とする。

調査方法：調査対象に選定した中学校に協力を依頼し，全校生徒に対する無記名のアンケート調査票の配布・回収を行った。

**表3**　熊本県B中学校の生徒数（2005年度）　（人）

| | 男子 | 女子 | 計 |
|---|---|---|---|
| 1学年 | 30 | 28 | 58 |
| 2学年 | 33 | 27 | 60 |
| 3学年 | 30 | 35 | 65 |
| 計 | 93 | 90 | 183 |

（出所）B中学校資料より作成。

調査実施の概要：北海道では道東酪農地帯A町の2中学校計92名を対象として2005年12月に実施し，有効回答89名分のアンケートを回収した。熊本県ではB市内の酪農地帯の1中学校183名を対象として2006年2月に実施し，有効回答172名分のアンケートを回収した。

2）アンケート調査結果

(1)　家族とのコミュニケーション

①　家族構成

回答者の性別は，A町，B市とも男女半々であった（表4）。家族構成は，A町では4人から6人が多く，B市では5から7人が多かった（表5）。祖父母との同居はA町では，半々であるが，B町では70％以上となり，3世代同居率が高い（表6）。兄弟，姉妹は1人から2人いる場合が多く，一人っ子割合はA町，B市とも1割以下であった（表7）。家族構成をまとめると，祖父母とも同居する3世代家族が多く，父母と子どもだけの2世代家族の場合でも，一人っ子は少なく，家族員数は4人から7人の間が多くなっている。なお，家の職業では，A町では酪農が6割を占めている（A町の校区内の農家は酪農家だけである）。B市では，酪農家は1割であるが，酪農以外の農家も約2割存在しているため，農家割合は約3割となっている（表8）。

②　家族とのコミュニケーション

休日に家族と一緒に出かけるかという設問には，「月に2～3回出かける」という回答が多く，「毎週出かける」と合わせると6割前後が出かけていた（表9）。一方，「ほとんど出かけない」という回答もA町で3割，B市では4割になっている。酪農家の場合は，搾乳等の作業の都合によって家族全員での食事時間を確保することが難しい場合があると想定される。しかし，夕食を家族と共にとるかどうかをた

**表4**　アンケート集計人数（男女別）

| | 地域 | 集計人数 | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 男子 | 女子 | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 43 | 44 | 2 | 89 |
| | 熊本県B市 | 86 | 86 | － | 172 |
| | 計 | 129 | 130 | 2 | 261 |
| 構成比（％） | 北海道A町 | 48.3 | 49.4 | 2.2 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 50.0 | 50.0 | － | 100.0 |
| | 計 | 49.4 | 49.8 | 0.8 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表5**　家族はあなたを含めて何人ですか

| | 地域 | 家族はあなたを含めて何人ですか | | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 3人 | 4人 | 5人 | 6人 | 7人 | 8人 | その他 | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 6 | 19 | 24 | 19 | 14 | 7 | － | 89 |
| | 熊本県B市 | 4 | 20 | 45 | 41 | 42 | 17 | 3 | 172 |
| | 計 | 10 | 39 | 69 | 60 | 56 | 24 | 3 | 261 |
| 構成比（％） | 北海道A町 | 6.7 | 21.3 | 27.0 | 21.3 | 15.7 | 7.9 | － | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 2.3 | 11.6 | 26.2 | 23.8 | 24.4 | 9.9 | 1.7 | 100.0 |
| | 計 | 3.8 | 14.9 | 26.4 | 23.0 | 21.5 | 9.2 | 1.1 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表6**　同居しているおじいさん，おばあさんがいますか

| | 地域 | 同居しているおじいさん，おばあさんがいますか | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 2人ともいる | おばあさんがいる | おじいさんがいる | いない | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 32 | 12 | 2 | 42 | 1 | 89 |
| | 熊本県B市 | 79 | 38 | 9 | 46 | － | 172 |
| | 計 | 111 | 50 | 11 | 88 | 1 | 261 |
| 構成比（％） | 北海道A町 | 36.0 | 13.5 | 2.2 | 47.2 | 1.1 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 45.9 | 22.1 | 5.2 | 26.7 | － | 100.0 |
| | 計 | 42.5 | 19.2 | 4.2 | 33.7 | 0.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表 7** 兄弟，姉妹はいますか

| | 地域 | 兄弟，姉妹はいますか | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 1人いる | 2人いる | 3人いる | 4人いる | 5人いる | いない | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 32 | 32 | 13 | 3 | 2 | 7 | 89 |
| | 熊本県B市 | 50 | 85 | 26 | 4 | − | 7 | 172 |
| | 計 | 82 | 117 | 39 | 7 | 2 | 14 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 36.0 | 36.0 | 14.6 | 3.4 | 2.2 | 7.9 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 29.1 | 49.4 | 15.1 | 2.3 | − | 4.1 | 100.0 |
| | 計 | 31.4 | 44.8 | 14.9 | 2.7 | 0.8 | 5.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表 8** 家のお仕事は何ですか

| | 地域 | 酪農 | 酪農以外 | 酪農以外の内訳 | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 酪農以外の農業 | サラリーマン | 自営業 | その他 | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 53 | 36 | − | − | − | − | − | 89 |
| | 熊本県B市 | 17 | 155 | 32 | 43 | 23 | 56 | 1 | 172 |
| | 計 | 70 | 191 | 32 | 43 | 23 | 56 | 1 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 59.6 | 40.4 | − | − | − | − | − | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 9.9 | 90.1 | 18.6 | 25.0 | 13.4 | 32.6 | 0.6 | 100.0 |
| | 計 | 26.8 | 73.2 | 12.3 | 16.5 | 8.8 | 21.5 | 0.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表 9** 休日は家族と一緒に出かけますか

| | 地域 | 休日は家族と一緒に出かけますか | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 毎週出かける | 月に2～3回出かける | ほとんど出かけない | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 9 | 50 | 30 | − | 89 |
| | 熊本県B市 | 17 | 78 | 76 | 1 | 172 |
| | 計 | 26 | 128 | 106 | 1 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 10.1 | 56.2 | 33.7 | − | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 9.9 | 45.3 | 44.2 | 0.6 | 100.0 |
| | 計 | 10.0 | 49.0 | 40.6 | 0.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表10** 夕食は家族と一緒に食べますか

| | 地域 | 夕食は家族と一緒に食べますか | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 家族全員一緒に | 家族の誰かと | 子どもだけで | 1人で | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 41 | 41 | 2 | 5 | 89 |
| | 熊本県B市 | 74 | 79 | 6 | 13 | 172 |
| | 計 | 115 | 120 | 8 | 18 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 46.1 | 46.1 | 2.2 | 5.6 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 43.0 | 45.9 | 3.5 | 7.6 | 100.0 |
| | 計 | 44.1 | 46.0 | 3.1 | 6.9 | 100.0 |

（資）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

ずねたところ，「家族全員一緒に」と「家族の誰かと」とを合わせると9割が家族と食事していた（表10）。なお，朝食については，家族の時間が合わないことが示されている。「子どもだけで」「1人で」と答える件数が増えており，「食べない」という回答も含めて，家族と朝食をとらない割合は，A町で55.0%，B市で44.3%になる（表11）。

両親との会話はしているかについては，A町，B市とも「よく話す」「簡単な会話をする」などの回答が90%ほどになり，意思疎通は普通に図られていると言える。一方では，「挨拶や用件のみ」「ほとんどない」という回答が，A町で計6.8%，B市で計

**表11**　朝食は家族と一緒に食べますか

| | 地域 | 朝食は家族と一緒に食べますか | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 家族全員一緒に | 家族の誰かと | 子どもだけで | 1人で | 食べない | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 13 | 27 | 18 | 29 | 2 | － | 89 |
| | 熊本県B市 | 23 | 72 | 28 | 40 | 8 | 1 | 172 |
| | 計 | 36 | 99 | 46 | 69 | 10 | 1 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 14.6 | 30.3 | 20.2 | 32.6 | 2.2 | － | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 13.4 | 41.9 | 16.3 | 23.3 | 4.7 | 0.6 | 100.0 |
| | 計 | 13.8 | 37.9 | 17.6 | 26.4 | 3.8 | 0.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表12**　ご両親との会話はしていますか

| | 地域 | ご両親との会話はしていますか | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | よく話す | 簡単な会話をする | 挨拶や用件のみ | ほとんどない | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 44 | 39 | 3 | 3 | － | 89 |
| | 熊本県B市 | 62 | 90 | 10 | 9 | 1 | 172 |
| | 計 | 106 | 129 | 13 | 12 | 1 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 49.4 | 43.8 | 3.4 | 3.4 | － | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 36.0 | 52.3 | 5.8 | 5.2 | 0.6 | 100.0 |
| | 計 | 40.6 | 49.4 | 5.0 | 4.6 | 0.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表13**　将来やってみたい仕事がありますか

| | 地域 | 将来やってみたい仕事がありますか | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | ある | ない | わからない | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 47 | 10 | 29 | 3 | 89 |
| | 熊本県B市 | 73 | 28 | 70 | 1 | 172 |
| | 計 | 120 | 38 | 99 | 4 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 52.8 | 11.2 | 32.6 | 3.4 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 42.4 | 16.3 | 40.7 | 0.6 | 100.0 |
| | 計 | 46.0 | 14.6 | 37.9 | 1.5 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

11.0%あり，親子間のコミュニケーションが円滑になされていないケースもある（表12）。

⑵　進路と地域への意識

①　進路

調査対象地域の中学生が想い描く進路を探るため，「将来やってみたい仕事がありますか」という設問に，「ある」「ない」「わからない」の選択肢で回答を求めた。その結果，「ある」との回答がA町で52.8%，B市で42.4%あり（表13），さらに，仕事の具体的内容を記入する答えでは，A町で46人，B市で70人の回答があった（表14，表15）。希望する職種は多岐にわたっており，それぞれがある程度具体的な将来像をイメージしていることが分かった。それらに共通する傾向を読み取ることはできないが，農畜産業に関係する仕事を希望する者も一定数存在することが明らかになった。

②　将来の居住地域の選択

「現在の地域に将来も住んでみたいですか」という問いを設定し，3つの選択肢で回答を求めたところ，A町，B市とも共通の傾向が表れ，「住んでみたい」が約2割，「都会にでたい」が約3割，「わからない」が約5割という結果であった（表16）。進路に対する考え方が明確になることと，居住地域の選択は深く関連していると考えられるが，「住んでみたい」「都会に出たい」と答えた理由を6つの中から選択させた。将来も現在の地域に「住んでみたい」理由は，「家族がいるから」と「友達がいるから」という人間関係を重視したものが約5割，「自然環境がよいから」が約3割という結果であった（表17）。一方，「都会に出たい」理由の選択肢は実質的に2つであり，「都会で働きたいから」「都会に住みたいから」という答えに集約される（表18）。

選択肢の中の「その他」で，具体的な理由が記載

**表14** 将来やってみたい仕事の内容（A町）（人）

| | 人数 |
|---|---|
| 農家 | 1 |
| 酪農 | 7 |
| 獣医 | 1 |
| 獣医（犬・猫） | 1 |
| 漁師，スポーツ店の店員 | 1 |
| 動物学者 | 1 |
| 医者 | 2 |
| 薬剤師 | 1 |
| 看護士 | 1 |
| 介護士 | 1 |
| 介護福祉士 | 1 |
| リハビリセンターで働く | 1 |
| 美容師 | 1 |
| 英語教師 | 1 |
| 中学教師 | 1 |
| 保育士 | 3 |
| 盲導犬の訓練士 | 1 |
| 警察 | 1 |
| 公務員 | 1 |
| 消防士，救急救命士 | 1 |
| 運輸屋 | 1 |
| 車関係 | 1 |
| 修理関係 | 1 |
| パティシエ（菓子職人） | 1 |
| コンビニレジ打ち | 1 |
| トリマー | 1 |
| イラストレーター | 1 |
| デザイナー | 1 |
| パイロット | 1 |
| フライトアテンダント | 1 |
| テレビ関係 | 1 |
| サラリーマン | 1 |
| プログラマー，ゲームクリエイター | 1 |
| バスケット | 1 |
| マンガ家 | 1 |
| 声優 | 1 |
| 天文関係 | 1 |
| 計 | 46 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表15** 将来やってみたい仕事の内容（B市）（人）

| | 人数 |
|---|---|
| 畜産 | 1 |
| 肥育 | 2 |
| 酪農 | 3 |
| 動物関係 | 2 |
| 園芸関係 | 1 |
| 花屋 | 1 |
| トリマー | 1 |
| 犬の訓練士 | 1 |
| 教師 | 4 |
| 警察 | 1 |
| 公認会計士 | 1 |
| 公務員 | 1 |
| 公務員，看護士 | 1 |
| 保育士 | 10 |
| 看護士 | 3 |
| 福祉 | 1 |
| 保健士 | 1 |
| 放射線技師 | 1 |
| 薬剤師 | 2 |
| 美容師 | 1 |
| 和菓子屋 | 1 |
| パティシエ（菓子職人） | 3 |
| 自動車整備士 | 2 |
| 電車の運転手（JR） | 1 |
| プログラマー | 1 |
| エンジニア，プログラマー | 1 |
| ゲームプログラマー | 1 |
| PC関係 | 1 |
| 電子について | 1 |
| グラフィックデザイナー | 1 |
| イラストレター | 1 |
| 絵関係 | 1 |
| 通訳 | 3 |
| ファーストフードの店員 | 2 |
| 事務関係 | 1 |
| 自営業 | 1 |
| 編集者 | 1 |
| 社長 | 1 |
| 趣味特技を活かせる仕事 | 1 |
| 小説家，又は収入の良い会社 | 1 |
| 科学者 | 1 |
| サッカー選手 | 1 |
| プロ野球選手 | 1 |
| スポーツトレーナー | 1 |
| 目立つ仕事 | 1 |
| 計 | 70 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

されたものを次に示す。

将来も現在の地域に「住んでみたい」理由の「その他」について，A町では「酪農をやりたいから」「町が静かだから」などがあり，B市では「都会はうるさいから」「悪いこととかがないから」「犯罪とかないから安心できる」「自分の故郷だから」という答えがあった。

将来は「都会に出たい」理由の「その他」については，A町では「都会に出て様々な経験をしたい」「夢のため」「便利だから」「大きい所で色々学びたいから」という答えがあり，B市では「お店に不便」「店がいっぱいあるところで,服をたくさん買いたいから」「田舎が嫌いだから」「働きたい会社が都会にある」という回答があった。

このように，アンケート結果では，将来も地域に

**表16**　現在の地域に将来も住んでみたいですか

| | 地域 | 現在の地域に将来も住んでみたいですか | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 住んでみたい | 都会に出たい | わからない | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 17 | 29 | 43 | － | 89 |
| | 熊本県B市 | 37 | 57 | 77 | 1 | 172 |
| | 計 | 54 | 86 | 120 | 1 | 261 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 19.1 | 32.6 | 48.3 | － | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 21.5 | 33.1 | 44.8 | 0.6 | 100.0 |
| | 計 | 20.7 | 33.0 | 46.0 | 0.4 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表17**　現在の地域に将来も「住んでみたい」と答えた理由（複数回答）

| | 地域 | 現在の地域に将来も「住んでみたい」と答えた理由 | | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 家族がいるから | 友達がいるから | 自然環境が良いから | 都会で働きたいから | 都会に住みたいから | その他 | NA | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 5 | 4 | 4 | － | － | 4 | 2 | 19 |
| | 熊本県B市 | 12 | 8 | 14 | － | － | 4 | － | 38 |
| | 計 | 17 | 12 | 18 | － | － | 8 | 2 | 57 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 26.3 | 21.1 | 21.1 | － | － | 21.1 | 10.5 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | 31.6 | 21.1 | 36.8 | － | － | 10.5 | － | 100.0 |
| | 計 | 29.8 | 21.1 | 31.6 | － | － | 14.0 | 3.5 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

**表18**　「都会に出たい」と答えた理由（複数回答）

| | 地域 | 「都会に出たい」と答えた理由 | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 家族がいるから | 友達がいるから | 自然環境が良いから | 都会で働きたいから | 都会に住みたいから | その他 | |
| 人数（人） | 北海道A町 | 1 | － | 1 | 8 | 17 | 6 | 33 |
| | 熊本県B市 | － | － | － | 26 | 27 | 6 | 59 |
| | 計 | 1 | － | 1 | 34 | 44 | 12 | 92 |
| 構成比（%） | 北海道A町 | 3.0 | － | 3.0 | 24.2 | 51.5 | 18.2 | 100.0 |
| | 熊本県B市 | － | － | － | 44.1 | 45.8 | 10.2 | 100.0 |
| | 計 | 1.1 | － | 1.1 | 37.0 | 47.8 | 13.0 | 100.0 |

（資料）2005年度共同研究アンケート調査結果より作成。

住みたいと答えたものは，家族や友達などの人間関係と自然環境の良さと地域の安全性を重視することを理由としてあげており，一方，職業選択の幅の広さ，都会の利便性が，将来は都会に出たいと考える理由となっていることが明らかとなった。

## 5．ま　と　め

本論文では，新規就農が職業の選択と同時に農場の所在する地域に居住することを選択するものであること，畜産業の経営継承は基本的に親子間でなされていることなどに着眼し，地域社会の様々な側面のうち，環境保全活動と環境教育プログラムを考察対象に取り上げた。とりわけ，中山間地域に位置する酪農地帯の場合，新規就農者は経営の継承者としてだけでなく，環境保全と地域社会の担い手としても重要な存在となる。

このような視点から，第一に酪農家自身による環境保全活動事例を取り上げた。北海道A町では，酪農家により環境美化のためのサクラ苗の植栽と学習林などの機能を持たせるためのミズナラ林の保全活動が展開していた。熊本県B市では，酪農女性グループによる廃油せっけんづくりが地域の行事ともタイアップさせながら取り組まれていた。地域住民が自ら居住環境を向上させる活動に取り組むことが，青少年の環境への意識をも向上させ，やがては地域社会の担い手を育むことにつながるものと期待される。

第二に，酪農家による環境活動が展開している上記A町とB市の小中学校の環境教育プログラムの現状を明らかにした。A町では，酪農家が中心となっ

て保全管理しているミズナラ林が自然環境を観察学習する場として活用されていた。B市では地元農業者との連携でファームステイが実施され，農業体験が学習の一環としてなされていた。なお，廃油せっけんづくりは，ホタルの生息地を守るために中学生が学ぶ地域の環境問題とも深く関係した取り組みであったことが注目される。

第三に，調査対象地域の中学生の進路選択と地域への意識をアンケート調査結果にもとづき明らかにした。家族構成では，一人っ子は少なく，４人から７人の家族があり，夕食を家族ととり，普通に両親との意思疎通ができているという家庭環境が読み取れた。進路については，約半数が農畜産業も含めて希望する職業のイメージをそれぞれ具体的に描いていた。地域に将来も居住することを希望する場合は，家族や友達などの人間関係と自然環境の良さ，及び地域の安全性が重視され，一方都会に出たい理由として，職業選択の幅の広さ，都会の利便性が意識されていた。

今回の調査研究により，酪農家による環境保全活動と地域の青少年の環境教育プログラムに具体的な関連性があることが明らかになった。今後の調査研究課題として，地域社会の担い手を育む活動に着眼した調査事例を豊富にすることと，青少年の地域の環境に関する意識調査内容を更に詳細化することを上げておきたい。

## 引用文献

〔1〕『「日本型畜産経営継承システム」の構築について』日本型畜産経営継承システム検討委員会・社団法人酪農ヘルパー全国協会，2000年。

〔2〕『日本型畜産経営継承システムフォローアップ勉強会報告書』社団法人酪農ヘルパー全国協会，2005年。

〔3〕荒木和秋「熊本県旭志村における酪農経営継承」『酪農経営の経営継承事例集』社団法人農村生活総合研究センター，2002年。

〔4〕發地喜久治「中山間地域等直接支払交付金制度の実施状況に関する調査研究 ── 北海道足寄町の事例より ──」『酪農学園大学紀要』第29巻第２号，2005年。